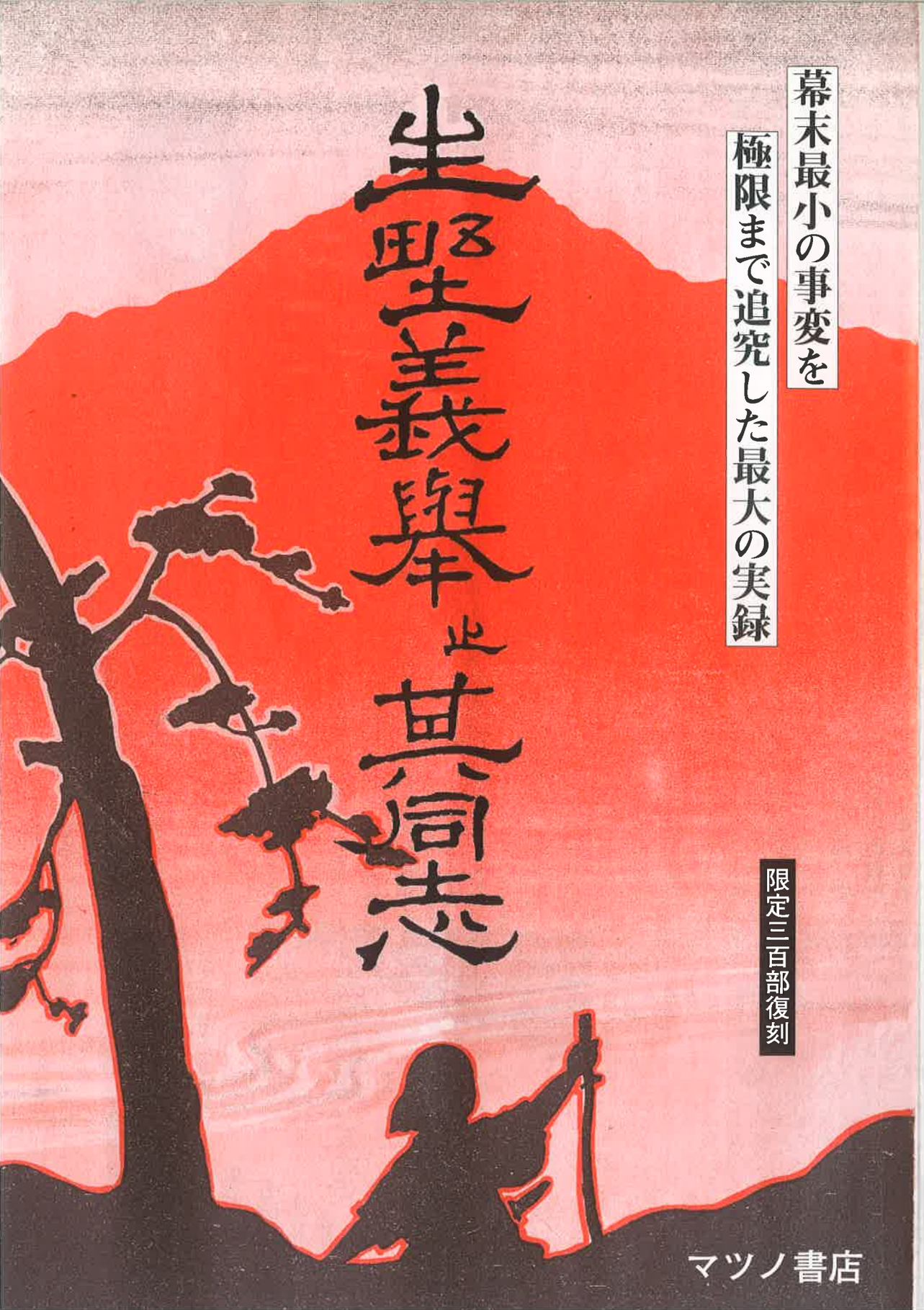

内容見本

に相成、兩三人立歸、最早御陣内御明渡に相成候に付、當家は引拂可ㇾ申云々。（北風正造文書）

とある。卽ち卿の一行は南八郎の率ゐる長州勢を先頭に陣屋へ向はせ、半時ばかり經つて、澤卿が乘込むと、門前に長州勢が出て來て、何事もなく代官所を借り受けたとの事であつた。長州勢が陣屋へ入つた際、急を聞いて元締武井正三郎が駈付けて來た。奇兵隊士は拔身の槍をつけて、當分の中陣屋を拜借すると談じ込んだ。武井は只今代官留守中、小職が勝手に貸すことは出來ない。併し亂暴狼籍をいたさねば、貸渡しても差支ないと、穩かに申渡した。南八郎は此時進み出て、心得たり、御陣内は無論町方に至るまで決して亂暴は致すまじ、心靜かに御開きあれ、尙又御持出しになる品物があるなら、隨意持參して引取られよと、慇懃に挨拶した。强談と言へば强談であるが、無茶苦茶に暴力を振つて亂入した譯ではなかつた。是は直接其衝に膺つた武井が切れ者であつた爲、浪士側でも相當の敬意を表した結果と見られる。役所に在つた刀鎗鐵砲などの武具武器類は、南八郎借受と云ふことにして引渡しを受けて居るが、槍などは柄が削つてあつたり、先が折つてあつたりして使へなかつた。武井を始め、岩佐幸兵衞、三坂各治郎、長谷川信太郎、並に地役人木村善右衞門、大塚太作、地方役小國謙藏、野口健次郎、其他の者は、代官所湯呑場に集つて評議を凝した。何せ代官所には川上代官の妻子、前記

内容見本

生野義擧と其同志

澤　宣一
望月　茂共著

第一章　序　說

文久三年癸亥十月十一日、但州生野銀山に於ける皇權恢復運動の一擧は、その外廓によつてのみ斷ずれば、山間僻邑に突發したる過眼の一小事變であつた。のみならず、兵を擧げて僅かに三日、同志の意相協はずして破陣となつた爲、その結果から見ても、明かに失敗に歸してゐた。併し乍ら、小は小なりとし失敗は失敗なりとして、これを維新史上から抹殺することは出來ない。當時、江戸に於て、又京都に於て、勃發したる討幕運動は、一聯の鎖となつて居て、彼是相關繫して居るが爲に、此の事件のみを除外することは素より不可能である。

初め安政五六年の交、水戸藩士は薩州藩士と提携し、關東に於て閣老井伊直弼の首を申受くると同時に、關西に於て義兵を擧ぐる手順であつた。一は成り、他は成らずと雖、その波及す

内容見本

第十二章　生野陣屋の占領

一　長州奇兵隊の活躍

議決して、疾風迅雷の勢となり、八ツ時頃（午前二時頃）になつて、寢て居た同志を起し、出陣の號令を出した。宿の者に向つては、草鞋其他の用意を命じ、身ごしらへを始めた。これを見て主人次郎左衞門は、大いに驚き、直ちに陣屋へ使者を飛ばして屆出た。そして尙始終の樣子を窺ひ又次の使者を陣屋に走らせた。この事實は彼の書面によつて明かである。

御支配より拙宅（次郎左衞門方）へ宿被仰付、五つ時（午後八時）過頃、不殘入込申候。尙追々相くはゝり凡三十四五人斗（はかり）と被存候、然る處、御陣内ゟ元締樣御入來被成何歟御對話に而御引取に相成申候、其後浪士密談數刻認もの等いたし居候處、鷄啼頃に至り俄に騷立、頻に酒飯を乞ひ、わらじ等を呼、身拵いたし候樣子に付、大いに相驚き早速御陣内へ樣子相屆け置、尙相窺居候處、甲冑或はうしろ鉢卷いたし連判狀抔讀立候に付、又々御陣内に註進に及候内、旗棹を取寄せ、いよ〳〵出立いたし候得共、何方へ向候や一向樣子不相分心配致居候内、夜明方

主人公（ヒーロー）のいない伝説

～「生野義挙と其同志」を読んで～

柳澤　京子

非業の最期を遂げた人々の記録を読むのは辛い。が、彼らがなんの私利私欲もなく、あたかもその運命に魅入られてしまったがごとく、目標に向かって一途に突き進む姿を見るとき、その辛さは一種独特な清々しさをもって、我々の胸に迫ってくる。

この『生野義挙と其同志』に描かれた人々は、まさにそうであった。

これは昭和初期、事件を直接知る最後の生き残りがまさに死に絶えんとするその直前、当時としても驚くべき粘り強さで地道に事件の真相を関係者から聞き取り、関連文書を探して書かれた……詳しく、文章もよくこなれた、しかも読みやすい迫真のドキュメンタリーである。

「生野の変？　なにそれ？」そう考えておられる方、まずなんの先入観もなく読んでいってみられるといい。百数十年前、国内外ともに揺れ動く時代に、但馬の山奥の小さな町で、国の将来を案じ、憂い、しかもなんの見返りも期待せず、勤王の志おさえがたく挙兵したはいいが、時勢の流れを読みきれず、ついには時代の捨石となって、むしろよろこんで果てていった人々の姿が次々と現れ、驚くに違いない。

その中の主だった人々のなかには、奇兵隊総督を務めた河上弥市（南八郎）が残像が印象深い。おのが政治的状況の読みの甘さゆえに、多くの同志に無念の死を遂げさせてしまった熱血の志士・平野国臣のやり切れぬ想いも心を打つ。その直情さゆえに、いわゆる七卿のうち最も数奇な運命をたどらざるをえなかった、澤　宣嘉卿の小説以上にスリリングな流浪の旅路……みながみな、英雄なんかではない。ひとりの生きた人間として悩み、苦しみ、決断する姿がそこにある。

八百ページ近い大編ではあるが、まるで小説でも読むように一気に読み進めてしまうのは、筆者の力量にもよるのだろうが、ここで初めて知る事柄が次から次へと現れ、飽きるということを覚えさせない、ということにとにも尽きると思う。次のページをめくるのがもどかしいような本に、久しぶりに出会えた気がした。

ありふれた歴史小説や読み物を読み飽きた読者諸氏、この本の、ドラマを越えた熱き魂の人々の姿から、ぜひ目からウロコをいっぱい落としてもらいたい、と心から思う。

上部は紫で装束の模様、下部に黒で白小倉の棒縞袴地を配したのは、公家と志士との双方に利かせたつもり。地色は黄で、これは当時浪士が好んで着衣に用い、一名「攘夷色」と言われていたという。ケースは猩猩緋の貼紙に黒の書名が際立つ。

目次

第一章　序説
第二章　義挙の中心勢力
第三章　農兵組織の運動
第四章　八月十八日の政變
第五章　但馬の農兵召募
第六章　挙兵計畫の準備
第七章　顔見世狂言の手筈
第八章　出石の二柱石
第九章　三田尻脱出の澤卿
第十章　總帥澤宣嘉卿
第十一章　挙兵論と挙兵中止論
第十二章　生野陣屋の占領
第十三章　生野本營の破陣
第十四章　妙見山下の碧血
第十五章　千町峠の澤卿一列
第十六章　前木一列の山崎落
第十七章　美玉三平及太郎兵衞
第十八章　旭建及多田彌太郎
第十九章　平野國臣の一列
第二十章　川又左一郎の一列
第二十一章　伊藤龍太郎の事變
第二十二章　姫路街道の犠牲
第二十三章　原六郎と太田二郎
第二十四章　甲子兵燹の餘焔
第二十五章　生野破陣の直後
第二十六章　豫州亡命の澤卿
第二十七章　長州潜居中の澤卿
第二十八章　但山播水有生色
▼引用書目　▼略年表　▼澤宣嘉卿略年譜
▼付録（①夢のなごり、②香川津孝子伝、③教民の詞、④民の手ぶり）

■本書の頁数について

本書の「活字本文」は七九二頁です。このほか、熱心な取材を証明する、当時としては出色の「写真・図版」八四頁が随所に散りばめられております。そして今回の復刻に際して巻末に添付する「本書刊行時のパンフ」（A5判二十頁）及び史料「九烈士碑銘」他四頁なども合わせると、ちょうど九百頁になります。

史料で築いた紙碑

東行記念館副館長・学芸員　一坂　太郎

昭和七年出版の沢宣一・望月茂共著『生野義挙と其同志』は、八百頁近い大冊である。文久三年（一八六三）十月、表面上は僅か三日で決着がついた一つの事変にかんし、七十年後、これだけ詳細な記録が編まれた事実に、驚かずにはいられない。これを著者は「殉難志士の為に、豊墳高碑を建つるよりも、更に一層有意義な事である」と述べている。

まず圧倒させられるのは、七年の歳月を費やし、何度も現地に足を運び収集し

生野の変（いくのへん）　幕末、尊王攘夷派の挙兵事件。但馬地方の豪農、中島太郎兵衛や北垣晋太郎（国道、のち京都府知事）らは農兵組織を進めていたが、一八六三（文久三）年八月十八日の政変後、京都を逐われた平野国臣らが加わり、天誅組と呼応した討幕挙兵を画策。七卿落ちの公家沢宣嘉を擁立し、長州からの脱藩士河上弥市らも加わった。天誅組は壊滅し、挙兵をめぐって対立があったが、十月十二日に生野代官所を占拠した。豪農に率いられて農民二千人が参集。しかし周辺諸藩の兵に包囲され、十月十三日には沢以下幹部の多

たという膨大な史資料の数々は、それに参加した人々の子孫が所蔵していたりする。昭和初期には、まだこれだけの質量とも豊かな幕末史料が残っていたのだ。

周知のように生野の挙兵には、七卿のひとり沢宣嘉を擁した奇兵隊総督河上弥一（南八郎）をはじめ白石廉作・伊藤百合五郎・長野熊之允・和田小伝二・小田村信之進・下瀬熊之進・井関英太郎らが隊を脱し、参加した。

ところが幕命により近隣の出石藩や姫路藩が追討に動くや、挙兵側は農兵二千が離反して内部分裂。追い詰められた河上は「議論より実を行へなまけ武士、国の大事を余所に見る馬鹿　皇国草莽臣南八郎」と高札に記し、他の隊士と共に自決する。

地元民から人気のあった河上は、死後も「八郎サン」として大切に祭られ、その墓所には参拝者が絶えなかったという逸話も興味をひく。しかも本書はこうした後日談ひとつでも、河上が自決した山口村の役人口上書や、風説集といった当時の史料を引用し、三頁にわたって実証的に、丁寧に解説する。

生き残り、高杉晋作の紹介で長州集義隊に身を寄せた但馬の農民太田二郎（西村哲二郎）の最後も、印象に残る。太田は河田左久馬に頼み、切腹の作法を習っていた。ところが慶応二年（一八六六）七月、同志のひとりが隊規を破った責をとり、本当に二十三歳で切腹してしまった。本書では淡々と事件の経緯を史料を並べ追い、ついには郷里に残っていた「彼の最後の手紙」まで見い出し、全文を掲げる。そうして「二郎の志、憐れむべしと雖も、長人間に但馬農民の義烈を発揚したる一点に於て、彼の死も亦徒労ではなかつた」と、哀悼の辞をもって、しめくくる。まさに「紙碑」と呼ぶに相応しい史書だ。

また本書後半を占める、四国を経て長州に潜伏し、維新を迎える沢の逃避行も、他の文献では余り知ることのできない史実である。

このように本書は長州幕末史を補う、奇兵隊「外伝」としての内容も備える。今回、山口県のマツノ書店から七十年ぶりに復刻される意義も、まずこのあたりにありそうだ。

■私はあらゆる「怪・力・乱・心」を信じない者ですが、この『生野義挙と其同志』を座右に置いていると、なぜか本書から妖気が漂い「早く復刻してくれ」と叫んでいるような気分になり、出版絶不況の逆風に抗してまでそれを実行することになりました。ホラー小説みたいですが、偽らざる今の心境です。

■本書の装丁は著者自身によるもので、右端の写真通り幕末の異様な雰囲気を象徴する、一度見ると忘れられないデザインですが、これも原本そのままのものにします。

■このたびは予約締切り後に印刷するため、予約部数よりやや多めに刷りますが、お得意様優先のため、予約特価と定価の値幅が大きいので、必ず予約特価でお求め下さい。

■申し上げるまでもないことですが、お買い上げの一週間以内でしたら返本を受け付けます。返送料のみご負担願います。　店主

れるなどして壊滅した。その後、農兵は豪農を打ちこわした。（岩波日本史辞典より）

■体　裁　A5判九百頁　上製貼箱入
■定　価　一万三千円（税込・送料四五〇円）
■特　価　九千八百円（　〃　）
■特価締切　十四年二月二十日（厳守）
■発　売　〃　三月下旬

▼「三点特価」は申込みハガキをご覧下さい。
▼限定部数は予約の状況で多少変わります。
▼直販につき書店卸は致しません。

限定三百部（番号入）

徳山市銀座二の一三
〒745　☎〇八三四(21)三二九五
マツノ書店

■現在本書の原本を所有しておられるお方の生の声

小生は長く『生野義挙と其同志』を所持しています。

内容はもちろん装丁も非常に立派で、このような本がもし江湖に迎えられないようでは、この国も文化果つるところかと、昨今の状況を非常に悲しんでいる一人です。

かつてこんなに立派な本が出ていたことを知った御社が、勇を振るって、たとえ「三百部限定」でも復刻されるのは、非常に有意義なことと存じます。しかし大損してもらっても困りますから、その点充分お考え下さい。

今夜東京から帰りました。執筆中の吉川弘文館〝人物叢書〟『高杉晋作』は、遅れに遅れて年度末になります。

（吹田市　梅渓昇）

『生野義挙と其同志』について、次のように回答申し上げます。

まず復刻する価値は大なりです。本書の長所は

①全編にみなぎる著者の熱意と「乱」の真実に迫ろうとする恐るべき史料探索の努力。

②出来るだけ公正たらんとする冷静な考証。

ただ「義挙」の知名度と書物の大部なことから、売価の設定を考えた場合、販売部数がいささか懸念され、それだけに貴店のご熱意には余計頭が下がります。以上用件のみ。

（浦安市　河上正夫）

『生野義挙と其同志』は実にすばらしい本です。

この挙兵が過小評価されている現在、如何に倒幕の序曲となる禁門の変に直結しているか、本書ほどの詳論は眼にしておりませぬ。

京都御所猿ヶ辻に於ける姉小路卿に対する襲撃の模様、平野国臣先生の立場等、また当時の人間関係について、本書に教えれらるところ極めて大でした。

掲載の写真も重要です。京都竹林寺の平野国臣先生の墓に本書持参で行きました。

ぜひこの装丁のまま復刻して下さい。復刻版も頂きます。

（富良野市　室崎洋）

■本書刊行時のパンフより

今や澤宣一、望月茂両君によりて、本書が刊行せられすでに世間に極めて評判高くして、事実の真相が未詳であった生野銀山における一挙が、分明となったことは、我らにとりて会心事の一つである。

（中略）あるいは義挙有志の武勇伝もあれば、銘銘伝もあり、いわゆる事実は小説よりも奇なりとの場面も、本書を通読すれば一切ならず出会する。我らは実に著者の苦心を諒として、我ら維新回天史の研究者に、好資料を寄与したるを感謝する。（徳富蘇峰）

澤・望月両君の共著せる『生野義挙と其同志』は、すこぶる浩瀚にしてその搭載するところの材料は、はなはだ多量豊富なり。而して群籍論考の工夫と、遺蹟探訪に尽くせる労力とは決して尋常人の及ぶところにあらず。書中に引証せられたる諸文書には往々珍篇奇什にして、容易に得難き貴重品文少からずとす。これ余の最も感服するところにして、かつその精力の強盛なるに驚愕する所以なり。

著者は、感心にも当時志士が苦忠の義跡を詳細に探検し、専心奮発、殊に健脚千里を極め、雄筆万紙を費やして、よく深遠の研究を完成し、ついにこの巨冊を刊行せられたり、結局、義挙の本精神を詳しく表顕している。いやしくもこの書を読める江湖の諸君子、必ずや余とその感を同じくするもの多からん。

（長州　村田峰次郎）

非常時の掛け声に終始した昭和七年掉尾の好出版としての『生野義挙と其同志』は何分八百頁の大著で、大晦日の一日とうとう除夜の鐘を聞くまでつい一気に読過してしまったほどの感興が巻中に横溢している。（中略）七十年前、桜痴居士の史筆を借りて言えば「生野の義挙は東大和の天誅組のそれとともに、たとえマッチの火にも過ぎなかったほどのものであったとはいえ、やがてその導火線の走るところ倒幕の大火団となって爆発した」のである。

本文二十八章百二十六余節、厖然たる叙事の絶頂は、いうまでもなく澤宣嘉卿を首領とした平野国臣以下の義徒が、文久三年十月、僅々三日間の「生野義挙と其同志」代官所における活劇そのものであるが、しかし、事ここに至るまでの経路および破陣後の推移は、この活劇を如何にも安々と会得せしめるために乱麻の如き朝幕諸藩の関係に運動の舞台となった但馬そのものにおける背景を精叙し、やがてまた、その一党、殊に宣嘉の動静を微細をうがって歴叙している。それには一時の流行である幕末、維新物の講談におけるあまりにも白々しい出鱈目は微塵にも見出されぬ。

著者の一人、澤宣一氏は宣嘉卿の孫として前後七ヵ年を述作に費やし、播但に三回、作州に一回義徒の跡を尋ね、伊予、長門にも渡って苟も史料と称するものはことごとく掌中にし、維新史料編纂局その他の官署に採訪し「燕居自箴」の如き遺録を綱本とし、田中光顕伯の精神的指導をも受けられたという。全く、尋常一様の売文業者のよくするところではない。

それは巻末に附載された引用書目を通覧しても如何に博覧傍証の限りを尽されたかが知られる。かくのごとくして私は本書の行文叙事を云々する前にこの熱心なる多くの条件を具備して出現した大冊が、読者を魅了する理由を十分に認めることが出来ようと思う。

（朝日新聞　牧野信之助）